

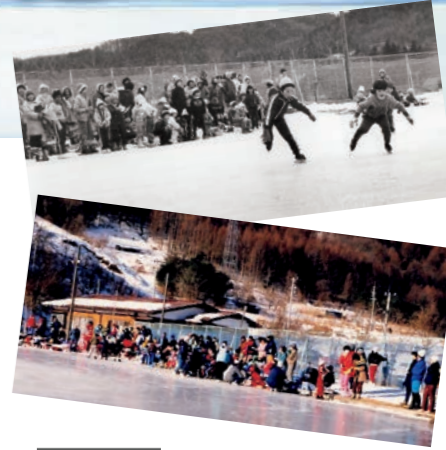
茅野市のスケート文化

茅野市にはスケート授業や校庭リンクがあり、古くから地域にスケート文化が根付いています。そこには、スケートに携わる地域の方々の強い思いがあります。

チノシノイノチ



インタビューを通じて茅野市の魅力を紹介。これまでに「御射鹿池」「八ヶ岳蕎麦切りの会」「読書の森 読りーむinちの」などを特集。バックナンバーはこちらから。



1 気候を活かした天然リンク

茅野市をはじめとする諏訪地域は、日本海側に比べて積雪量が少なく、標高が高く湖が凍る時期が長いことから、スケートが盛んに行われてきました。明治36年(1903年)頃から田んぼや湖でのスケートが始まり、昭和になると、学校の校庭に水を張って凍らせる「校庭リンク」が作られるようになります。地域にスケート文化が根付いていきました。

2 スケート靴の進化

高価であった靴スケートの代わりに、下駄に金属製のプレートを組み合わせた「下駄スケート」(通称「鉄こぶ」)が誕生しました。厚い鉄の塊のような刃が特徴です。

明治41年(1908年)頃には、諏訪湖で下駄スケートによるスケート大会が開催されています。安価な下駄スケートは、ほとんどの家庭に

手を目指す子どもたちやスケートを愛する人たちが集い、スケート文化の発展につながってほしいという願いが込められたこのリンクからは、小平奈緒さんをはじめ、世界で活躍する多くの選手を輩出しています。
—小平奈緒さん「このリンクとともに成長してきた思い出があります。」

「諏訪湖一周スケート大会」
明治41年(1908年)撮影。第1回諏訪湖一周スケート大会の様子。背後に中央線を走る自動車も見える。
出典：みんなでつくる下諏訪町デジタルアルバム(シロトリ写真館)



動画で配信中



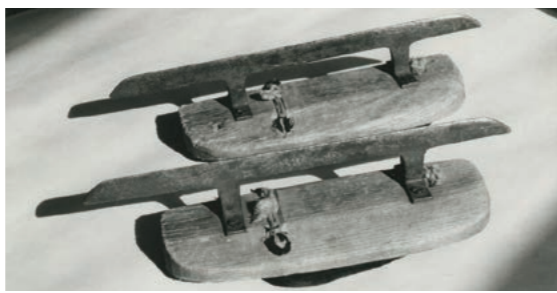
懐かしい写真とともにお届けします。

ありました。それから数年のうちに、スピードを追求すべく、ブレードや支柱の改良が進められました。平成10年(1998年)長野オリンピック以降は、かかとの部分がブレードから離れる「スラップスケート靴」が主流となりました。

3 国際スケートセンターの誕生

氷が張ればどこでもスケートを楽しめる田んぼリンクですが、風が吹くと砂が舞い込み、滑っているとスケートの刃を傷つけてしまうという課題がありました。

平成元年(1989年)、市民からの提案がきっかけとなり、国際規格のリンクを有する茅野市運動公園国際スケートセンターが誕生しました。平成30年(2018年)には、平昌2018冬季オリンピックで金メダルを獲得した小平奈緒選手の功績をたたえ、「NAO ice OVAL」の愛称が付きましました。次世代オリンピック選



「下駄スケート」
カネヤマ式下駄スケート。明治39年(1906年)諏訪地方最初の下駄スケート。一足30銭(約3,000円)ほどで売り出された。外国製の靴スケートは、平均15円(今の約25万円)だった。
所蔵：下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館
出典：みんなでつくる下諏訪町デジタルアルバム(下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館)



「下駄スケートをする子供たち」
大正14年(1925年)～昭和初期撮影。子どもたちにとって、スケートは身近な娯楽だった。どの家庭にも、スケート靴があった。
出典：みんなでつくる下諏訪町デジタルアルバム(下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館)

まさに“神”技! 校庭リンク作り ~金沢小学校 ver.~

1 11月初旬 落ち葉拾い、地ならし



落ち葉はスケートの刃を傷つけやすく、氷が溶けやすくなるため、落ち葉拾いは重要な作業。

2 11月下旬 水入れ、リンクづくり



校庭中央に「水取り入れ口」、周囲に「防風ネット」を設置する。水取り入れ口だけだと波が立ち、水面が凍らないため、周りに「波消し板」を設置する(写真左)。水を張り、氷が張ったらリンク中央が盛り上がるのを防ぐ緩衝帯を作る(写真右)。



水取り入れ口

3 12月下旬~1月末 水撒き

気温がマイナス5度以下になるのを目安に「水撒き」が行われ、氷を徐々に厚くする。天然リンクはヒビが入るため、濡らした雪を詰めてヒビを補修する(写真右)。機械は使わず、すべて人力。「水を撒いた氷上は非常に滑りやすいため、撒いた水の上には乗らないように、後退しながら水撒き作業にあたります。」(写真左)



4 1月上旬 リンク開き



大会前には「雑巾がけ」を行い、リンクを滑らかにする。写真は、タンクから出る水を浸した毛布で雑巾がけ作業をする様子。



突撃インタビュー! スケートまるまる

Q1. 始めたきっかけは?

物心ついた頃には、スケートをしていた。

- ・ 保育園の頃、祖父に連れられて遊び始めた。
- ・ 自宅の前に校庭リンクがあったため、保育園の頃には氷の上に立っていた。
- ・ クラスの大半がスケートクラブに入部していて、入部しないとイケないと思った。

スケートあるある

- ・ スケート靴を脱ぐと足がジンジンしてしばらく歩けない。
- ・ 練習中、コーチからは見えないだろうと思われる場所で少し力を抜くが、実は結構見られている。(後で叱られる)
- ・ 泊まりで行く大会は、友達と旅行気分が楽しい♪
- ・ 階段を上がる時や駅のホームで電車を待っている時、無意識にスケートフォームや足運びをしている。
- ・ スピードスケート経験者は、フィギュアの靴で滑るのが苦手。

スケートにまつわる“あるある”をスケート経験者に聞きました

Q2. 魅力を教えて!

辛抱・我慢強く、寒さに強くなる。

- ・ 全国に友達や知り合いができる。
- ・ 北海道などの遠征先に行くことができ、その土地の名産物を食べられる。
- ・ 練習を重ねると、ラップタイムの「感覚」が掴める。
- ・ 夏場に苦しんだ人ほど、冬の結果につながる。

スケート年表

茅野市のスケート史をまとめました。



スケートを“繋ぐ”人

インタビュー全編は動画でご覧いただけます



平昌 2018 冬季オリンピック
スピードスケート女子 500m 金メダリスト
小平 奈緒さん (茅野市出身、相澤病院所属)
「身近な人がみんなスケートを経験していることがスケートを始めるきっかけとなりました」



小平 奈緒さん



宮川小学校スケートクラブ 堀 あかりコーチ



金沢体育協会 伊東 秀樹さん



世界最高齢スピードスケーター 丸茂 伊一さん



茅野市スケート協会 池上 泰司さん

- 1 茅野市のスケートリンクで育った地元の若手指導者が指導する姿も多く見られる。宮川小学校スケートクラブ 堀あかりコーチ「スケートを楽しんで滑ってもらえるように役に立てたらと思いつつ、指導しています」
- 2 金沢小学校校庭リンクを守り続ける、リンク作りの“神” 金沢体育協会 伊東秀樹さん「子どもたちが継いでくれることを願っています」
- 3 世界最高齢スピードスケーター 丸茂伊一さん(茅野市玉川在住)「氷が張ればどこでも滑っていた。滑る楽しさは格別。今もなお、記録への挑戦を続ける 94 歳。」
- 4 茅野市スケート協会 池上泰司さん「スケートの活性化はまだ課題がありますが、みんなで意見交換しているところです」

4 若手指導者が繋ぐスケート文化

茅野市スケート協会では、「教える人がいないと子どもたちが育たない」と、地域で育った若手指導者の育成に主眼を置いています。

「宮川小学校スケートクラブ 堀あかりコーチ「必ずしも金メダルやオリンピックを目指さなくてもよいと思います。どうしたら速くなるかを考えることを大切にしたいと思います。」

5 リンク作りの“神”

スケートの盛んな茅野市ですが、少子化によるスケート人口の減少や温暖化によるリンク作りの難しさなどの課題も抱えています。平成元年(1989年)以降、茅野市運動公園国際スケートセンターの開設に伴い、校庭リンクを有する学校は激減しました。現在は、泉野小学校と金沢小学校で校庭リンクが地域の人々によって作り続けられています。

校庭リンク作りは、11月に校庭の落ち葉拾いをするところから始まります。11月下旬から地ならしをし、水を表面に張り、リンク中央が盛り上がるのを防ぐ緩衝帯を作ります。気温が下がると、水撒きや雑巾がけと呼ばれるリンクを厚く平らにする作業が毎晩続けられ、1月上旬にリンク開きを迎えます。

— 金沢体育協会 伊東秀樹さん

6 市民スポーツ「スケート」

諏訪地域の小学校では冬になるとスケート授業があります。そのため、諏訪地域で育った市民のほとんどは、大人になってもスケートを滑ることができます。

毎年1月下旬に開催される諏訪地方スケート大会は、多くの世代の選手が出場する大会です。開催回数72回の歴史ある大会であり、諏訪地域のスケート文化の原点とも言えます。

— 小平奈緒さん「まちや人が元気になるきっかけをスケートが作ってくれたらいいなと思います。」

7 世代を超えて 受け継がれるスケート文化

地域に根を張り、人々をつなぎ合わせてきた茅野市のスケート文化。これからも親から子へ、人から人へと世代を超えて受け継がれていきます。